



## [討論]

社会学部教授  
奥村 隆 氏

○藤田 それでは、このまま第2部にまいります。では、先生方、壇上によりしくお願いいたします。

第2部では、第1部のご講演をもとに指定討論を行います。まずは討論者の先生方をご紹介します。向かって左から、経営学部教授、スコット・デイヴィス先生。ビジネスデザイン研究科、経営学部准教授の山中伸彦先生。観光学部教授の豊田三佳先生。国際基督教大学日本語教育課程課程准教授の小澤伊久美先生。社会学部教授の奥村隆先生。日本語教育センター副センター長、法学部教授の東條吉純先生。異文化コミュニケーション学部教授、前日本語教育センター長の池田伸子先生です。コーディネーターは日本語教育センター長の丸山先生です。では先生、お願いいたします。

○丸山 お待たせしました。それでは、第2部を始めたいと思います。初めにコメンテーターのお二人の先生にコメントを頂戴いたしたいと思います。本日はお二人のコメンテーターの先生にお願いしております。お一人は、先ほど藤田先生からご紹介があった社会学部の奥村先生でいらっしゃいますけれども、2013年から日本語教育センターの運営委員のメンバーに入っていて、ずっと日本語教育センターが困ったときも、困ったときも、困ったときも支えてくださった先生でいらっしゃいます。そして日本語教育センターの経過をよくご存じの奥村先生に、学部のお立場から本日はコメントを頂戴いたしたいと思います。それから、もう一方は国際基督教大学の小澤先生ですけれども、日本語教育センターは科研のプログラムで、プログラム評価にも取り組んでおります。学外の評価者、評価の専門家ということで、小澤先生にずっと日本語教育センターを見ていただ

いております。そのプログラム評価の観点からとコメントをちょうだいしたいと思えます。10分弱ぐらいでお願いできたらと思えます。まず奥村先生、よろしく願ひいたします。

○奥村 社会学部の奥村と申します。よろしく願ひいたします。

今、丸山先生にご紹介いただきましたように、私は2013年に社会学部長としての役割で日本語教育センターとかかわるようになりまして、4年近くになります。きょうこういう場を与えていただいて、日本語教育にはもちろん全く専門家ではありませんし、学部も、社会学部は特に具体的に連携しているわけじゃないので、いいのかなと思ひながらですが、コメントいたします。

社会学者は大体場違いなことを言うのが仕事なので場違いのこと言おうかなと思ひていたんですけども、どうもきょうはそうもいかないようです。直前の打ち合わせのときは、きょうのシンポジウムはきつものすごくボアリング（退屈）なんじゃないか、などと言っていたんですね。例えば、東條先生の報告とかは、大学のメッセンジャーみたいな感じで、こんなにうまくいっていますといった話かなと思ひたし、うちの研究科はこんなにすごいぞ、というような公式見解というか、学部案内みたいな感じの話になっていくのかなとパワポの資料だけ見て思ひ、東條先生はやっぱり前総長室長として見事な官僚ぶりだな、うまいことやりがあって（笑）などと思ひました。別の言い方をすると、人の姿が見えないような、このパワポを見ても人の名前が出てこないと言ひますが、そういうふうなことになってしまうのではないかと、とちよつと思ひていたんですね。

ですが、きょうのシンポジウムのご報告自体は、すでに皆さんおわかりのように、それとは全く正反対のものだったと思ひます。東條先生が最後におっしゃった言葉を使わせていただくと、この立教大学の中にさまざまな「アンデレたち」がいて、そのアンデレたちがそれぞれの現場でいかに人と人をつないで新しいものをつくり出しているのか、それが、立教の中のいろいろな場所でこんな形で起こっているんだということを見出し、非常に驚き、心を揺さぶられるというか、非常に感動的だったと思ひます。私自身知らなかったことが多いですし、多くのことを学ばせていただいたと思ひます。それは、パワーポイントを見ただけではわからないと言ひますが、それぞれの現場のそれぞれのアンデレたちがどんなパッションを持って、人をつなぎ、新しいことを生み出しているのかということが、きょうのお話を聞いて非常に強くわかったように思ひます。

さて、まず1つ目のコメントです。では、どういう条件のもとでそういうアンデレたちが活躍していくことが可能なのか。これを私なりに考えるのですけれども、もう先生方がお話くださったことと重なることしか私は申し上げられないかとも思います。1つは、やはりそれぞれの現場、それぞれの組織が持っているミッションです。きょうのお話はすべてそれぞれが強烈で明確なミッションを持っているということを伝えたのではないかと思います。そして同時に、もちろんそのミッション、使命があるからこそ、各アクターが、強いパッション、東條先生の言葉で言えばエートスといいますか、情熱、熱意を持って活動している、ということなんだろうと思うんです。

そして、もう1つの条件は、明確な現場を持っているということです。例えばデイヴィス先生のお話で言えば、スウェーデンの学生デビッドがこうしてほしいと言って、それがすぐフィードバックされるという、現場を見て、現場から学んで動かしていく現場主義がある。つねに現場を見ている、現場とのやり取りをしているということが、こういうことを可能にしているんじゃないかと思います。

さらにもう1つ、デイヴィス先生のお話から学ばせていただいたのが、そういう新しいものが生まれる場所、例えば、2つの組織が結びついて新しい日本語教育プログラムをつくり、それから海外からの大学院生たちが日本語でビジネスができるような学習をしていく、というプロセスの中で生まれたものとして挙げてくださった「コンテクスチュアリティ」と「エンパシー」ということです。文脈を踏まえて深く物事を捉え直すということや、感受性といいますか、共感する力というもの、おそらくそれぞれのアンデレが携えているものだと思います。逆に連携をする中で、そういうコンテクスチュアリティと共感が培われていく。恐らく1つの組織に閉じこもっているときには生まれないものが、そこで生まれているんじゃないかなと思います。

私はこの3年半ぐらい日本語教育センターを近くで見させていただいて、ここはそういうコンテクスチュアリティやエンパシーが生まれる場所だなあと感じましたし、ミッションとパッション、現場を見るエートスが息づいている場所だと思ってきました。今後このセンターは、そういう新しいものを生み出していくような条件、アンデレたちをつくり出すような条件をもった、触発を生み得るような場所であり続けることができるだろう、と思いました。

でも、こんななんだかい感じの話だけで終わったら私は役目を果たしたこと

に全然ならないので、第2のコメントです。もう1つ考えるべきことがある。それは、どういう条件、どういう環境のもとで「アンデレたち」はディスカレッジされてしまうのかということだと思えます。一方に「アンデレたち」をエンパワーする、エンカレッジする条件がさまざまにある。ただ同時に、アンデレたちをディスカレッジさせ、フラストレーションを起こさせる要因がある。そしてついにはアンデレをどこかに旅立たせてしまう、みたいな、そういう恐ろしいことも時々起こるわけですね（笑）。

その要因にはいろいろあると思えます。例えば、東條先生のスライドの最後のほうに出てきた非常に示唆的な図だと思いますけれども、組織というものを制度面と機能面で捉えると、全く違う図ができるわけです。先ほど申し上げたコンテクスチュアリティとエンパシーが人と人をつなぐのですが、つなぐのを阻害するものの1つとして、やはりビューロクラシー（官僚制）というものがあると思えます。ビューロクラシーというものはコンプライアンスや、公平さや、前例主義を重視します。不公平にならないようにということ、規則に従うということはもちろん重要です。ただ、そのときに、新しく生まれたコンテキストや、新しい人と人のエンパシーの関係をどうしても阻害してしまうということがあるんだと思えます。SGUで記された、第1の学生の送り出し、第2の受け入れに続く第3のターゲットである組織の国際化対応をどうするか。それは、恐らくそもそもどんな組織をつくっていくか、そしてこういう人たちをエンパワーし、エンカレッジするような組織の形はどのようなかを考えていくということじゃないかとも思えます。

きょうのこのシンポジウムの中に出させていただいて、もう1つ思いましたのは、そういう現場1つ1つで起こっていることをどうやって学内全体でヴィジブルにしていくか、見えるようにしていくかということが凄く大事だということです。私、きょうのお話を聞いて、ものすごく驚いているわけです。初めて知ってですね。MIBなんてそもそも体制側で敵だ、なぜあんなに資源使うんだよ、みたいに、ちょっと思っていたりしたわけです（笑）。

が、きょうのお話を聞いて非常に感動し、なんてすばらしいんだと思いました。これは、日本語教育センターが結んでいる関係が、このように新しいプログラムを生み出しているという先進的な事例です。それは、私のような不勉強な者が学部の中において見えないということだけではなくて、大学全体の中で、そういう国

際化の動きがちゃんと見えているか、そのミッションが何か、そこでどんなパッションエイトなことが起こっているか、どんな新しい触発が生まれているか、それが見えているかという、やっぱり見えるようになっていないと思うんですね。きょうの打ち合わせの中で豊田先生と丸山先生がお話されていて、短期プログラムについて豊田先生が、「誰がどこでやっているのかわからない」とおっしゃったんですね。そのことを「顔が見えない」というふうにおっしゃいましたが、やっぱり顔が見えない状態になっているということもあるような気がします。それぞれの現場で取り組まれている国際化の1枚1枚の絵が、大学全体で共有されるにはどうすればよいか。それが共有されないまま各現場が孤立していくとき、それぞれがやっぱり疲弊してしまうところがあると思うんです。

そのために必要なことは、恐らく東條先生の図にあったように、アンデレたちをつなぐ仕組みの構築なのだと思います。1つ重要なのは、きょうのテーマであった学部と研究科とセンターをつないでいく仕組みです。ですがもう1つは、資源配分を担っていて、人的リソースやバジェットを配分する意思決定をシマネージする場所、大学のヘッドクォーターと各現場をどうつなぐか、その仕組みをどうつくるかということだと思います。そのときに大事なことは、きょうのお話を伺っても強く思うことですが、現場のほうがよく知っているということです。現場のほうが、何が必要か、何をすべきかというのがわかっていて、現場から離れれば離れるほど、知らないわけです。ですので、現場から離れた意思決定の中核というのは、現場に教えてもらう立場であることを肝に銘じなければなりません。学生のデビッドの発言にMIBが教えてもらって新しい仕組みをつくったように、教えてもらうという態度が大切なことなんだと思います。さっき申し上げましたエンパシーやコンテクスチュアリティと同時に、そういう新しいネットワークをつくること、組織のつくり方の中で1つ1つの現場がヴィジブルになっていくということが必要なことじゃないかなと思いました。

最後に、もう1つ重要だと思うのは、ミッションとかコアバリューということ。先ほど申し上げたように、各現場、各組織はそれぞれ強いミッション、明確なミッションを持っている。では、大学はどうなのか。各部署部局はハンドリング可能なサイズですので、明確なミッションを持って、それによって生まれるコンテクスチュアリティやエンパシーによってビューロクラシーを変えていくということもできるんじゃないかと思うんですね。ただ、逆に大学全体となると、

これは図体が大きいのですので、どうしてもビューロクラシーでやっていかないと難しいというところも恐らくあると思います。

ただ、この大学が、こういうミッションでやっていくんだということが共有されれば、それは変えられるのではないかとも思います。では、立教の立教らしい国際化とは何か。どんなミッションを私たちは共有しているのか。さらには、立教とは何か、そのミッションとは何か。これが、はたして今はどうなっているのだろうか。東條先生はエートスが枯渇する前にとおっしゃったけれども、いまの状況はやっぱり随分それが疲弊してやせ細っているんじゃないか、ぼんやりしているんじゃないかという気がいたします。

どうやって「アンデレたち」をエンパワーするのか。あるいは、どのようにして、どのような場所で、この大学の中で新しいアンデレたちを育てるのか。そして、このアンデレたちがパッションを持って仕事をやり続けるための条件をどうやってつくるのか。これをきょうのシンポジウムは提起してくれたんじゃないかなと思います。これで、私からの比較のおとなしめのコメントを終わりにいたします。どうもありがとうございました。

## [討論]



国際基督教大学 日本語教育課程 課程准教授  
小澤 伊久美 氏

○小澤 ICUの小澤と申します。とてもいいお話の後で、話しくいなという気がしています。さて、実は、センターでプログラム評価をやりようと言いだめたのは、大学の大きなミッションに対してセンターは結構貢献しているし、大学のミッションに対してそれでいいのかという思いも持っているので、大学側と一緒に話してミッションを突き詰め、その上で評価をしたい、貢献を示したいということからだったんですね。ところが、初年度にいろいろ考えてみたけれども、大学側と共通認識が持てないままやっても、それは評価にならないし、そうであればやる意味がないので、まずは共通の土台づくりをしましょう、そこに活かせることを評価の手法を用いてみましょう、ということで、ここ何年か私はセンターのプログラム評価にかかわってきました。きょうのお話について、私はプログラム評価からセンターの今後、それからセンターの現状についてコメントしたいと思います。【スライド⑦-1】

まず現状ですけれども、評価の結果を活用した運営を続けることで認知を上げましようと言っていたんですが、例えば、きょうとてもいい事例だと思ったのは、日本語相談室です。評価の結果を生かして、その稼働率を上げるとか、利用者の状況を把握して、このような新しい形ならどうだろうと改善をした。改善の結果、稼働率が上がった、利用者の声もよくなったということを示し、さらに今度は、大学院生の利用が多いことを把握し、何をどのようにしたら大学院生のニーズに応えるのかという次の課題を今回発見していて、多分、これに対して今後、対応していらっしゃるんだろうなと思うのですが、そういういいサイクルを、小さいけれども活動から評価、それを生かして活動を改善して実施というようにうまく

回している、という、いい事例だったと思いました。【スライド⑦-2】

それから、きょうお話のあった学部や研究科との連携でカリキュラムを作成するということにも、小さいけれども、その専門分野のニーズを拾うときに、例えば、インタビューをしてみるとか、実際に学生たちの声を聞くとか、いろいろなことで学生のニーズも拾う、専門分野の方のニーズも拾う。それから、カリキュラムを作成してみて、それに合わないプレイスメントテストではまずいんじゃないかというので変えてみる。あるいは、授業をやってみました、うまくカリキュラムが回りましたという成果の検証もしているということで、ここでも評価というものをうまく使っているんじゃないかなと思いました。【スライド⑦-3】

それと重なるんですが、評価の結果を他者に発信する、そして、それを交渉の窓口に使うということもうまくやっていたらいいなと思いました。カリキュラム作成の段階でも、もちろん学内の関連分野の方とお話されていますけれども、その授業の成果などを研究発表として発信していらっしゃるのです、大学外にも発信していますし【スライド⑦-4】、きょうのようなシンポジウムは学外に対しても記録も出ますし、いいなと思います。

今回のシンポジウムの場合はそれに加えて、まず、準備段階で学内のいろいろな部署で話し合いをしていて、お互いに「そんなことがあるのね」というような情報交換ができて認知が上がりますし、シンポジウムの結果をきつと総長室に持っていらっしゃるんだらうと思うと、いろいろな意味でいいですね。この公開シンポジウムはきょうこの1時間、2時間だけではない成果がいろいろあるんじゃないかなと思います。うまく活用していると思いました。

それから、ウェブサイトやニューズレターなどで、その卒業生、あるいは在校生の声を公開していたり、公開して終わりではなく、それをいろいろなところに届けているというのも、評価をうまく広報に使っていると思いますし、それから、きょうは出てきていないんですが、関係している海外の機関の方の声を聞いて、それを現場に戻ってきて学内の関係者に伝えるということもやっているのです、センターはうまくその辺（評価の手法を活用した他者への発信や交渉）をやってきたと思います。【スライド⑦-5】

では、これからどうするかというところで幾つかコメントなんですが、【スライド⑦-6】やはり成果を見せるというところをもっともっと今後も続けたいと思いました。今までやってきましたけれども、次はどこでやるのか、どのよう



な方法で、そして誰に対してやるのかというところですよ。それともう1つは、いろいろなことできょう見えてきたように、例えばデイヴィス先生のお話を聞いても、日本語は単なるツールではないとか、contextualizationとか、いろいろなことを考えたときにセンターが何ができるかということ、教師の力量が関わってくる。日本語を教えるときに何を考えて教えるのが本当に必要なことなのかということを教師が考えて行動することが必要。そうすると評価をすること・したことを、教師の力量形成に生かすということもセンターでは考えていくべきだろうと思うんですね。【スライド⑦-8】

ただ、発展的で持続可能とするためには、きょうのような会で出たことを全部拾っていったら疲弊してしまうので、することはポイントを絞ることが大事でしょう。今年はこれをやる、今はこれをやる、といったような。ただ、大きい目標を見失わないでそこに至るためには、今年はこちら、来年はここをやるというような大きな設計が必要だと思います。そして、取り組みや目標が小さくても、その達成度を測っていくことで、自分たちも達成できたということが感じられ、やる気を見失わずにいけますし、第三者にもここまでやっていますよということを小口で見せられるほうがいいのではないかなと思うんです。そうすると、発展する、そして持続可能とする、ためにはポイントを絞ることが必要で、かつ、成果を小さくても測ることは非常に重要だと思います。

成果を測るという点でいうと、改善の見られる時期は狙い目なので逃さない。例えば、立ち上げの時期はいろいろな課題があるけれども、やってみたらうまくいった、あるいはいかなかったという答えが出せる。その振り返りを生かして2度目にやれば、さらに改善できるというふうに、初期の3年間ぐらいは非常に大きな成果が見せやすいので、そこはしっかりデータをとって見せるといいんじゃないかなと思うんですね。で、うまくいったら、あとはもう定点観測でうまくいったものが続いていますよということを見せる。でも、うまくいったものがもう常態になってしまうと、うまく行くのが当たり前で、そのことに誰も気づいてくれないということになりがち。なので、やはり困難を乗り越えたという初期は逃さずに評価しておくというのが大事じゃないかなと思います。【スライド⑦-8】

それから、もう1つはファシリテーション。きょうのような場も見ていても、日本語教育センターは、関係者の声を把握せざるを得ない、聞かざるを得ない組織だと思うんですね。【スライド⑦-9】ですから、そこを逆に利用して、「私た

ちは（ステークホルダー、つまり利害関係者から）聞いたんです」ということを関係各位に伝えていく役割を担っていく、連携を強化する、ということ。ただ、そこも全部やっていたらお役がたくさん回ってくるので、まずはどこ、次はどこというふうに考え、誰から誰にというようなことも考えどころじゃないかなと思います。

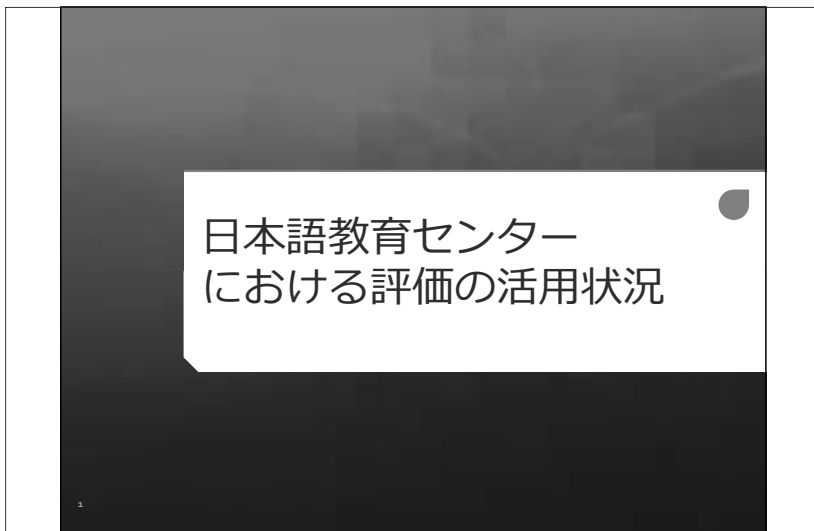
同じことですが、もう1つ、それをすることで私たちはそういうことができるものだという力量を見せる。そうすると、センターの人たちすごいね、役に立つねと言ってもらえると思うので、センターの認知も高まると思うんですね。そのときにも何を使うのか、どのようにするのか、そして誰に対して伝えていくのかということも大事かなと思いました。

きょうの話を聞いていても、顔を見て話すことは非常にいいと思うんです。でも、顔がないまま紙を見ても伝わりませんが、顔だけ見てわかった気になって解散してしまっても、次年度また忘れてしまうんですね。だから、きょうのような会をやって、それをもとにして顔のわかる人にもものを見せていく、数字を見せていくという両方を回していくというのが大事じゃないかなと思いました。【スライド⑦-10】

以上です。【スライド⑦-11】

○丸山 ありがとうございます。

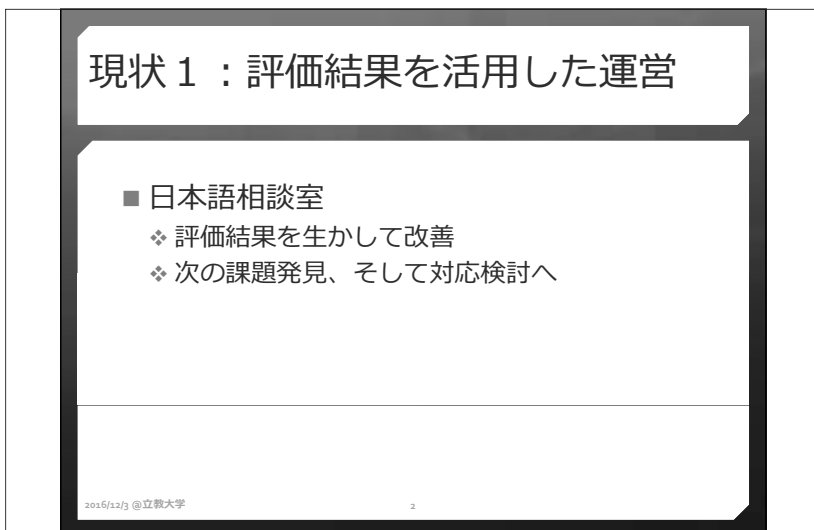
【スライド⑦-1】



日本語教育センター  
における評価の活用状況

1

【スライド⑦-2】



現状1：評価結果を活用した運営

- 日本語相談室
  - ❖ 評価結果を生かして改善
  - ❖ 次の課題発見、そして対応検討へ

2016/12/5 @立教大学 2

【スライド⑦-3】

## 現状 1 : 評価結果を活用した運営

- 学部・研究科との連携でカリキュラム作成
  - ❖ 専門分野のニーズを拾う
  - ❖ 学生のニーズを専門担当者に伝達
  - ❖ カリキュラム作成、PT開発
  - ❖ 成果の検証

2016/12/5 @立教大学 3

【スライド⑦-4】

## 現状 2 : 他者への発信・交渉

- 学部・研究科との連携でカリキュラム作成
- 授業（の成果）に関する研究発表

2016/12/5 @立教大学 4

## 【スライド⑦-5】

現状 2 : 他者への発信・交渉

- 公開シンポジウムの活用 [学内外に対して]
- ウェブサイトやニュースレターなどの発行
- 学外も含めて、関係者の声を聴く

2016/12/3 @立教大学 5

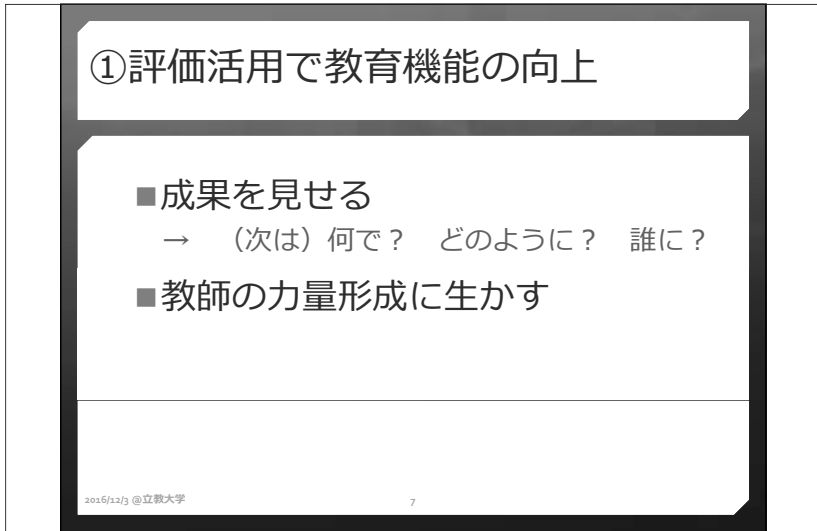
## 【スライド⑦-6】

これからどうする？

プログラム評価の観点から  
日本語教育センターへのコメント

6

【スライド⑦-7】

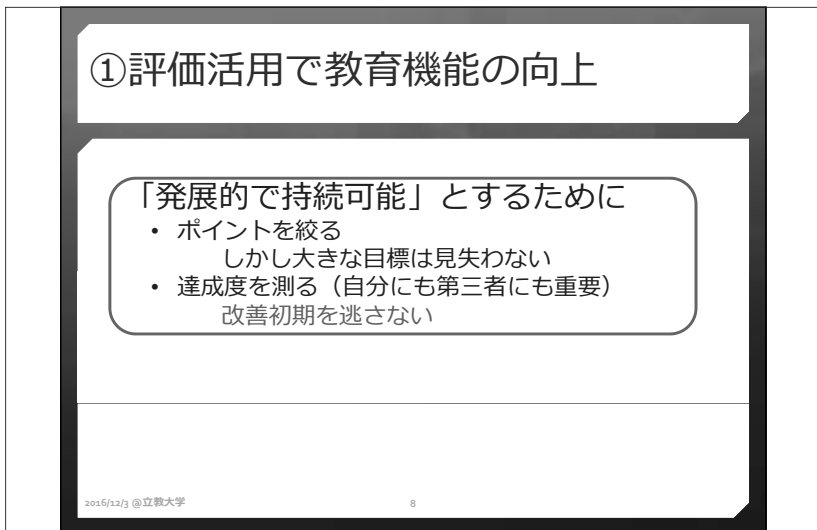


①評価活用で教育機能の向上

- 成果を見せる  
→ (次は) 何で? どのように? 誰に?
- 教師の力量形成に生かす

2016/12/5 @立教大学 7

【スライド⑦-8】



①評価活用で教育機能の向上

「発展的で持続可能」とするために

- ・ポイントを絞る  
しかし大きな目標は見失わない
- ・達成度を測る (自分にも第三者にも重要)  
改善初期を逃さない

2016/12/5 @立教大学 8

【スライド⑦-9】

②評価活用でファシリテーション

- (大学国際化に関わる広い) 関係者の声を把握せざるを得ない組織
  - 他者に伝え、連携を強化
    - (次は) どこ? 何? 誰から誰に?

2016/12/3 @立教大学 9

【スライド⑦-10】

②評価活用でファシリテーション

- (大学国際化に関わる広い) 関係者の声を把握せざるを得ない組織
  - それができるスキルを見せ、センターの認知を高める
    - 何で? どのように? 誰に?

2016/12/3 @立教大学 10

【スライド⑦-11】





# 全体討議

○丸山 きょうは50分ぐらい、全体のディスカッションをと思って、たっぷり皆さんとお話できるという計画でいたんですけども、恐れ入りますが、残り少ない時間になってしまいました。まずフロアの皆様から少し質問とご意見をちょうだいいたしまして、そして本日の登壇者の皆さんと少しディスカッションするという形で、45分ちょっと過ぎで終了というのを目指したいと思います。

それでは、フロアの皆様、ご発言よろしく願いいたします。

○会場 文学部長で文化研究科委員長をさせていただいております西原廉太です。本日は大変もう、予想以上と言うと怒られてしまうのですが、すごく面白かったです。もう本当に勉強になりましたし、それからエンカレッジされました。ありがとうございました。

私は、文学部キリスト教学科の教員でありますし聖公会の司祭でもありますので、本当はアンデレについて詳細に議論したいのですが、それはちょっとさて置きまして、特にきょうのお話の中で、先ほどの先生のお話にも出ていましたけれども、やはり日本語相談室ですね。それをぜひ、特に研究科、文学研究科などで常日ごろ悩んでいる点がありまして、それは、やはり院生、海外からの留学生、特に東洋からの学生が多いんですけども、面接をするわけですよね。そこである程度コミュニケーションもできますし、内容も何かわかっている。多少本も読めているっていうのはわかるんですが、いざ入ってきてみると、書けないんです





ね。文化研究科ですと、やっぱり一番の目標はちゃんと修士論文ないしドクター論文を日本語で仕上げるといふ目標がございます。それが、実はふたをあけてみると全然できない、一から、日本語の書き方ですね。それから、論文の書き方などの基礎知識をやらなきゃいけない。日本人の院生に手伝わってもらうんですが、日本人の院生も日本語を知らなかったりするのです、逆効果だったり、二重手間だったりするわけですね。

そういうわけで、もうぜひ、日本語教育センターのほうで、今後またこのような日本語相談室などの支援をいただきますと大変助かるなと思いますし、それについては、大学院生のチューターなども研究科のほうでもちゃんと用意しながら、しかし、チューターのトレーニングの仕方ですね。日本語の支援、中途半端な日本語支援をされると、かえって大変だということになりますので、その辺のチューターのトレーニングのスキームなども含めて、論文の書き方、レポートの書き方、日本語の構造とか、そういったものを総合的に研究科と日本語相談室、日本語教育センター協力しながら運営できる。そういう連携ができるとありがたいなと思いますので、ぜひ今後ともよろしく願いいたします。

以上です。

○丸山 どうもありがとうございました。これについてちょっとだけ。先生が今おっしゃってくださったように、きょう冒頭で日本語教育センターの日本語相談室が抱えている課題、それからこれから留学生増に向けて、もうすぐに来るであろう時代を見すえてコメントを頂戴いたしましたと思います。

今、日本語教育センターは教育講師の4名が週12コマで展開しているものでございますが、その日本語教育講師の先生方が持っている能力を最大限生かすような形で、そして、多くの留学生の日本語の運用力を高めるような仕組みというのをつくらなくてはいけないと思っています。そのためには、学部の研究科との連携というのを具体的に考えてまいりたいと思いますので、ぜひ来年度以降の課題にしてまいりたいと思います。ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。ご質問など、お願いいたします。

○**会場** 経済学部の小澤です。きょうはありがとうございました。楽しかったです。

キャンパスを国際化するというのはとても重要だと思うんですが、そのために留学生に来てもらわなければいけない。日本語教育センターは非常に重要だと思うんですけども、まず、日本語の教育がすぐれているということが、海外の学生、正規に留学しようと思ってる学生にとってどのくらいアピールするののかというのは、ちょっと私は全然わからないの

で、まずそれを教えていただきたいということと、あと、池田先生が最後におっしゃっていたことは、発展させていくと大学付属の日本語学校ができてしまいそうな気がするんですけども、そういう方向ではないのかどうかということを確認したいんですが、よろしいでしょうか。

○**丸山** 1つ目のご質問については日本語のプログラムがすごくいいということが海外の学生にどれほどアピールするのかということについてのご質問について、デイヴィス先生からお答えいただけますでしょうか。

○**デイヴィス** 一番回答に適していない人になぜ振るのだろうと思いつつも、実は今の1点目と2点目はあわせてちょっと考えるところがあるんですけども、日本の一部の大学行きますと、別科があって、そこで盛んに日本を学んでいる学生さんが行って、そしてその人たちがずば抜けて優秀な人であれば、そのまま正式に入学して、そうでない99%はどこかに行ってしまうという。それは嫌だな。それは嫌だなというか、2,000人という数もあまり気に入らないんですね。2,000人というのが、それだけ切り離して先に出てきているわけでも何でも無いというのもよくわかるんですけども、別科を持っていないこの立教大学が、海外にいる多くの学生さんに来てもらってここで学んでもらおうとしたら、ここでなければ学べないのって何なんだというところを考えると、2,000じゃなくて3,000、4,000、5,000だったりするかもわかりません。いや、本当。ただ、適当に2,000人をとすると、2,000人残らせるためにどうしたらいいんだろう





という本末転倒の状態になる可能性が極めて見えて怖くなるんですね。

ですから、海外に日本語教育が非常にすぐれているということは宣伝すべきではなくて、海外から立教大学に来ている学生は数少ないかもわかりませんが、ここでの学びを終えて、これだけのことを世界中やっていますよと言って、商品を宣伝すべき。経営学部なので、こういう下品な言い方を使うのですけれども、逆でもあるかなと思うんです。

○丸山 ありがとうございます。池田先生。

○池田 私もデイヴィス先生と大体同じで、今は立教大学もそこそこ日本国内では有名なので、それから入学試験に英語を課していないので、留学生にとっては非常に受けやすい大学なんですよ。出願しやすい大学って言ったほうがいいかもしれないですけども。だから、日本留学試験なんかでも、立教大学の場合にはすごく高い得点層を入れているはずなんです。けれども、それではもはやだめなんですよ。異文化は。大学がとかは言わないですよ。異文化は。なので、繰り返しになりますけれども、本当に地頭があって、伸びしろのあるすごく優秀な留学生を海外から直接、立教大学に連れてくるというのが、唯一の道です。そのためには、デイヴィス先生のように、日本の教育がありますよということで売るんじゃなくて、立教大学に入ってきたらこういう学びがあって、将来こういう出口がありますよ。でも、私、日本語できないんです。大丈夫です。これが大事。そのためには、来た学生を立教大学の学生として受け入れて、そこでちゃんと、立教大学の中で、立教大学のそれぞれの学部が望むような日本語教育を学部と連携して展開していくというのが重要なのです。

○丸山 よろしいでしょうか。ありがとうございました。

○東條 一言だけ。「立教アンバサダー」育成構想の狙いはまさにそこにあります。一人ひとりの留学生に、広報大使として各国で立教の価値を発信していただく。

○丸山 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○会場 公益財団法人京都日本語教育センターの西原と申します。本日は本当にミッションと、それから歴史と、立教という品格の中で1つのベクトルに向か

って皆さんが心を1つによい留学生の受け入れの環境をつくっていらっしゃるということに本当に感動いたしました。実はお声をかけていただいてこちらに参ったのですけれども、京都のほうで1つ、全く別の視点かもしれないけれども、先ほどのご質問にあったかと思いますが、立命館大学と当方が二十数年、30年近く連携しております。これは立命館大学にも日本語教育センターがございます、言語センターがございますし、国際センターがあって、そこも連携するのですけれども、先ほど池田先生がおっしゃったよ



うな、立命館は、実はいわゆる高度人材として、思考能力の高いものを、地頭を採る。日本語教育をどうするかということですが、やはり英語基準は増えていますけれども、日本語教育は必要なので、これは、本当に連携してその入学前のこと、それは一般の日本学校がして一般的な進学予備教育はどこに行くかわからない。これから行く先を探すんですけれども、立命館のプログラムとしてあるといった連携も1つの可能性としてあるのではないかと。私どもはそれをもう何十年も、一番は短期ですけれども、短期といっても半年ぐらいの、ハワイ大学などは短期と言っても6カ月をいたしますので、その日本語教育は、専門教育は大学、日本語教育はうちがするという連携のシステムのようなものが構築されて、お互いに信頼を持っている。1つは、アジア人財資金構想は両方の名前で経産省に申請して通ったということもあって、そういう意味で、1つ、外部の日本語教育との基礎的なところではですね。大学では、アカデミックな専門性の高いもの、そうした新しい展開も必要で、私はちょっと文科省の高等教育の委員会で検討委員会がありましたのは、こうしたシステムを国家としてどうしてつくるかという、3年間、検討委員会がありました。そして、それには日本語学校の、他の日本語教育機関の質の担保が必要だと。今で言えば、ISOであるとか第三者評価だとか、そうした条件も出されて、国として、私ども今、立命と組んでいるのも、法務省、文科省の相談、応援をもとに行っているということがありまして、きょうのお話は私どもに本当に勉強になったんですが、そうした事例もちょっと別の視点で、

社会的には起こり得るかなということをちょっと思いまして、本当にありがとうございました。

○丸山 コメント頂戴いたしまして、どうもありがとうございました。

では、ちょっと45分を過ぎたところなんですけれども、ご来場の方々、よろしいでしょうか。では、デイヴィス先生、ちょっと一言。

○デイヴィス 私が話をしすぎちゃってこういう時間になってるので、ここでもた大きく息を吸って「それでは」と言うと、多分、灰皿はないんだけれども、あったら飛んでくるだろうと。

さっき、ビューロクラシーという話をされた方がいると思うんですけど、ビューロクラシーというのは、基本的にこれまでにできたものの守り神として責任を果たしていて、あれ自体を批判すべき存在でもないし、悪いものでもないんですが、私が以前、お手伝いしている会社で、セブン・アンド・アイホールディングスで鈴木会長という人がいて、彼があるとき、役員をしかっているところを見ていて、終わったところで、なぜそんなに怒るのと聞いたら、「いや、あいつらはとんでもない仕事の設計しているんだ」と。なかなかいい案だと思って聞いてましたけれども、どうしたって聞いたら、「成果が出ないでしょう」と。粗利はもう出てきて、売り上げも確保できそうなのでいいなと。何が成果と聞いたら、「違う。かかわってくる人たち全員の成果がないでしょう」と。一部の人たちは成果を得られるけれども、そうでない人たちは何もなし」と。「成果の出ない仕事ほどつらいものがないよ」とその場で言われた。ビューロクラシーが抵抗的になってくるというところは、私は卒業式で泣かれて礼を言われる。卒業して、「売上1億円、達成しました」と言われて、やって来て報告されるのは私なんです。教務にいる方々ではなくて、会計課の方々ではなくてという。ですから、この辺のバランスも、特色を発揮して、我々はミッションだ、ビジョンだと言っているながら、オールじゃないとできないと思うので、もうちょっとこの辺の配分も考えるべきだなと思うんですね。

全くできていないことをこの場で最後に言っても、あと突っ込みはないだろうと思って、できていないことを堂々と言ってますけれども。

○丸山 ありがとうございました。

○山中 最後に一言ということだと思うんですが、あまりちょっと、どういうことをお話しすればいいのかわからないんですが、大学、教育機関なので、カリキ

キュラムというものがあるんだと思うんですね。カリキュラムをどうつくっていくかというのが、やはり教育機関の教育の品質をどう維持して高めていくかというときの、戦略的な課題の1つでもあるんだと思います。ただ、入学してから、修了、あるいは卒業するまでに、カリキュラムをそんなに自由に換えられないので、どういう目標を持ってどういう人材を教育するかという理念をもとに、それを踏まえてカリキュラムをつくるということになります。でも、環境の変化が早いと、どうもそのつくったカリキュラムや、描いた人材像に自信が持てなくなってしまって、環境が変化しているから、すぐ変えなきゃいけないんだと思うようになります。変革の根拠を求めるために、成果が出ているかどうかを見るんですけども、教育効果を1つの成果として捉えたときに、どこで測るかというのは結構難しいわけです。私たちの大学院でもやっぱり環境が変化している。留学生が増えてくるというのも直接的にあらわれている変化なので、それに合わせて、カリキュラムを変える必要があるんだと考えるんですけども、一方で、自分たちの掲げている理念とか、人材像とか、社会から自分たちの研究科はどうかということを求められているかということ、安易に変えていくべきでもない、どうしてもその対応というのは、しばしば場当たり的に見えてしまったりするようです。ただ日本の大学や日本の社会がますますグローバル化していくということを





考えたときに、まさに、私たちの研究科の中では、中国からの留学生がたくさん増えていて、そういう人たちとどういふふうと一緒に学んでいくかということは、将来起こり得るかもしれない問題を先取りしているというほどではないと思うんですが、日本人の社会人にとっても良い学習の機会となりうるのかもしれないと思います。なかなかそんなに落ち着いて考えられないというところもあるので、試行錯誤しているわけですが。

その試行錯誤をしているときに、日本語教育センターの先生方のお力添えを得て、何とか、場当たりの対応だけれども、対応できたということですので、これをより持続可能な、より発展的な形にしていくにはどうすればいいかということは、あらためてきょう先生方のご意見というか、お話を伺って考えていければいいなと思いました。どうもありがとうございました。

○**豊田** これは日本語教育というよりも、むしろ私自身このプログラムにかかわって一番思ったのは、その成果が立教大生に出ているというところに、やっぱり注目するべきなんじゃないかなという点です。インバウンドで観光なんかでも、いろいろな地域にどんどん外国人を呼ぼうと言っても、実は地域はうまくいかなかったりして、そういう状況が立教の中にも起こるかもしれない。留学生をどんどん入れようと言って、でも、逆に立教生は何か嫌だという感じになるかもしれないので、何かここでこれから次の一步を考えるときには、それが立教生にとってどれだけプラスにどういふふうになるのかをちゃんと捉えておかないといけないんじゃないかなという気がちょっとしました。



○**小澤** きょうは2つ思いました。最初にデイヴィス先生がおっしゃった、職員の方も含めてオール立教なんだというお話なんですけれども、センターの方とお話していて、センターの職員の方がものすごく支えてくださる、そのパッションはどこから来るんだろうといつも気にされているんです。センターの方にそういうところまで目配りがあるので、そういったセンターはこれから面白いんじゃないかと思ったのが一点。



もう1つは、総長室とかに持っていきと言ったときに、個々の組織が上に持っていきと、「まあまあ」と言われて、なしになるというのは、どこでもよくあることだと思うんですね。うちもそうなんですけれども。でも、こうやって横がつながっていて、あそこもそう思っている、ここもそう思っている。私たちだけではなくて、みんなの声ですと持っていくことでやっぱり影響力が出てくると思うので、そういうのをうまく生かしていただければと思いました。以上です。

○**奥村** 本日はまことにありがとうございました。私はあと4カ月で立教を離れますので、よい思い出ができたなと思います。とても楽しい、素晴らしい機会だったと。希望を感じるシンポジウムだったと思います。

最後に、私から一言。Rikkyo, it's not too late と申し上げたいと思います。ありがとうございました。

○**東條** 私は日本語教育センターのお仕事を手伝っておりますので、本日、小澤先生の、どこから着手し、誰から誰に、どの範囲で、といったセンターの人的資源の制約をきちんと考えた上で、優先順位と可能な範囲というのを決めていくべきとのご助言、大変ありがたく受け取りました。というのは、私自身の反省も込めて申し上げますが、4月来、丸山先生に対して、プッシュ、プッシュ、またプッシュの繰り返しでございまして、思いつくことを全ていったん受けとめていただいております。おそらく、その上で丸山先生がセンター長として優先順位付けをして、うまく具体的なスケジュールに落とし込んでくださっているのだと思います。

もう1点、私の「アンデレ」ロールモデルは隣に座っておられる奥村先生ですが、2014年以降、すでに3年間お付き合いさせていただき、この間、奥村先生の拳惜進退や物事への関わり方を拝見していて、「ああ、私はまだまだである」と強く感じております。引き続き、どうぞよろしく願いいたします。

○**池田** 私は半分、日本語教育センターの立場でもあり、半分、学部研究科の立場ということで、どちらもよくわかっていながらお話をさせていただきましたが、きょう私がお願いをしたことは、本当に喫緊の課題だと思っています。これをどれだけ早く、それも他大がやっていない立教型のモデルを立教の中に確立できるかというところが、立教は今とても大事なところに来ています。今まで立教はどこかがやってからじゃないと何か同じことを始めないというような特質を持っておりましたので、ぜひこの部分については、まだどこの大学やっていない立教の



モデルというのを、ぜひ2018年度を目指して実現していただければと思います。私もまだ希望は持っています。

それから、奥村先生、本当に3年間ありがとうございました。私は部長会のときに奥村先生がななめ前にいて、ぶいぶい同じような文句を目と目で共有しながら、また、日本語教育センターの会議で私の愚痴を聞いていただくことが唯一のストレス解消でございました。ぜひ今後とも、関西に行かれましてもよろしく願いいたします。ありがとうございました。

○丸山 ありがとうございました。きょうの会の中で役割、ミッションというのがキーワードになって進んできていたんだなと思いました。私自身、日本語教育を始めてそれなりに年数がたちましたが、すごく現場に近い自分だと思っていたんですけども、今回、学部、それから研究科の先生方といろいろなやり取りを密にさせていただく中で、現場の捉え方というのを私自身を変えて、日本語教育センターの現場も違うステージに立つときを迎えているんだなという思いを強くいたしました。今回のシンポジウムが来年度以降の日本語教育センターの行く先を示してくれているような思いがいたします。本日はどうもありがとうございました。

○藤田 先生方、ありがとうございました。以上をもちまして本日のシンポジウムを終了させていただきます。皆様、本日は長時間にわたりご清聴いただきましてありがとうございました。

幾つかちょっと事務連絡がございます。まず、先ほどお配りしたアンケートですけれども、入り口付近に係の者がおりますので、お帰りの際にご提出いただければと思います。

そしてまた、次回以降のシンポジウムについてご案内を差し上げたいと思っております。よろしければ、入口でございます用紙にメールアドレスをお書きください。

そして、会場ですけれども、5時に閉める予定でしたが、今5時ですね。そ



れほど時間をあけずに閉めたいと思っておりますので、ご協力のほどお願いいたします。

これ以降のご歓談ですけれども、こちらの建物の1階、もしくは中2階のグローバルラウンジはご利用ください。

それでは本日はありがとうございました。